

「食品産地偽装事件」

作 佐藤 良士

彰子	五十歳	船場の料亭「兆吉」のおかみ
和江	二十五歳	「兆吉」の嫁、慶彦の妻
ふみ	十八歳	「兆吉」の使用人
慶彦	二十七歳	彰子の息子、「兆吉」の若旦那

劇は、船場の老舗料亭「兆吉」の離れ座敷で進行する。座敷は十畳ほどの広さで、「兆吉」が繁盛していた頃は、上客用の客室で使用されていたが、今は「兆吉」のおかみ・彰子の私室になっている。上手が入り口のふすまで、正面に物入れとセットになった飾りだな、下手側は籐の応接セットが置かれた濡れ縁で、中庭に続いている。

挿入歌は大阪のわらべ歌「天満の市」

1 嫁と姑

春、中庭の奥にある桜は、葉桜に変わりつつある。

「兆吉」の離れ座敷で、和服の彰子が籐椅子で帳簿のようなものを広げながら、思索している。

彰子 今月もまた赤字やなあ。

(庭を眺めながら溜息)

彰子 赤字、赤字、赤字、溜まるのは赤字ばかり。

(また、溜息)

彰子 大きな運を運んでくれる招き猫でも、きはれへんかいな。

使用人のふみが、大きな「招き猫」を抱えて座敷に入ってくる。この招き猫は真っ黒で、どういう訳か異国風の顔つきをしている。

ふみ あのー。

彰子 (気付かず) やっぱり、和江さんが言うように、うちのよう
な古い料理屋は、やり方を変えなあかんのやろか。

ふみ あのー、

彰子 お父さん、何で私を残して、亡くなりはったん。

ふみ あのー

彰子 ほんまに、私一人では、このお店は重と過ぎます。

ふみ ほんまに、私には、この招き猫は重と過ぎます。

彰子 え、！？(突然、ふみに気付いて) どないしたんや、その招
き猫。

ふみ へえ、何でもインドから送って来はったんやけど、気持ち悪
いから、おかみさんのところに持って行きて言われました。

ふみ インドから？、ほな慶彦が帰ってきたんか。

彰子 慶彦はなんて、若旦那さんですか。

ふみ そうや、若旦那さんや。

ふみ それやったら、若旦那はんは、インドに料理の勉強に行つた
はるて言うけど、そんな口実で本当はお店のお商売が嫌い
やから、遊びに行つたきりで、まだ帰つてきはれへんて、若
おかみさんが言つたはりました。

彰子 それで、その猫はんがインドから来はったんか。

ふみ へえ。

彰子 それ、重たいんやろ、ここへ降ろし。

ふみが「へえー」といいながら、まねき猫をテーブルに降ろ

し、それからヤレヤレ、という風に畳の上に足を伸ばしてたり、腕をさすったり、突然、気づいて座り直したりして、

彰子 ほんまや、真っ黒なお顔やけど、確かにまねき猫はんみたいやな。

ふみ おかみさん、インドにもまねき猫が居たはるんですか。

彰子 インドでもお商売する人は居たはるんと違うか。

ふみ そやけど、おかみさん、インドには変わった神さんが沢山居たはるて、聞いたことがあります。

彰子 変わった神さんて、どんな神さんや。

ふみ 象の顔した神さんや、鳥の顔した神さんとか、亀の神さんも居たはるて、聞きました。

彰子 ふーん、それやったら、これは猫の神さんやろか。

ふみ きっと、神さんと違いますんか、猫は化けて出たりしますさかいな、もしかしたら化け猫の神さんかもしれまへん。

彰子 何でこんなもん送ってきたんやろ。

ふみ インドで化け猫、捕まえたんと違いますか。

彰子 アホやな、こんなかわいい顔の化け猫さんがあるかいな。

(壁の時計を見て) あんた、そろそろ、お店が忙しなると違うんか。

ふみ 私はお店のほうはええから、おかみさんのお相手をしてるよ
うにて……。

彰子 若おかみさんが言いはったんか。

ふみ へえ、おかみさんと一緒に、夜桜でも見ときなはれて、おかみはん、私まだ造幣局の通り抜け、見に行ったことないんです。

彰子 そうか、ほな今度お休みあげるさかい、一人で気の済むまで、見に行つといなはれ。

ふみ へえ、おおきに。

彰子が居つまいを正して、ふみのほうに向き直って、

彰子 (ふみに) 和江はん、私はまだ全部おかみをまかしたんと違
いますえ。

すると、ふみも態度を改め、和江のふりで、

ふみ お母はん、慶彦はんの嫁になったということはこの家のおか
みになったということと違います？

彰子 そやけど、和江さんには、ほんまに騙されたわ。京都のお公

家さんの出やいづから、おっとりしたお嬢さんかと思てたら、
とんでもないお転婆。

ふみ お母はん、騙されたんは私のほうですえ。お婿さんは、船場
の古い老舗料理屋の跡取りやいづけど、商売嫌いの遊び好き。
お店のことは私に押し付けて、インドに行ったまま帰って来
はれへん。

彰子 嫁の実家は京都で指よりの呉服屋やいづけど、古いばかり
で潰れかけ。お店のお金ごまかして、実家に貢いでるのと違
うやろか。

ふみ 嫁いだお店は赤字だらけ、お母はん、私の持参金、あてにし
たはったん、どなたどしたん？

彰子 慶彦さんが京都の大学に行ったのが間違いやった。あの子は
ほんまに世間知らずのボンボンで、いつの間にか、あんな娘
に誘われてしもて。

ふみ お母はん、誘われたんは私のほうですえ。大学祭のダンスパ
ーティーで。慶彦さんの唯一得意のダンスに誘われて、私は
ボーとなってしもたんどすえ。

彰子 あの子のダンスはお父さん譲り。あれは三十五年前の中の島
の公会堂のダンスパーティーやった。私がお父さんに抱かれて、
初めてダンスを踊ったんは。

ふみ お母はん、これからは外国のお料理も研究せなあきまへんど
すえ。いつまでも三十五年前の夢、追うてたら時代に遅れて
しまいますぞすえ。

彰子 そう言うて、慶彦さんをそそのかして、インドなんかに追い
出したんと違うやろか。

ふみ あんな、頭の古いお母はん、もういらんさかい、台所のすり
こぎで頭どついて、古いのれんでグルグル巻きにして、裏の
川に流しておしまい。

彰子 (驚いて、ふみの顔を見て) それも、和江さんが言いはった
んか？

ふみ いいえ、これは私が言ったんです。

店のほうから、「ふみさん、ちょっと来て頂戴」という声が聞
こえる。

彰子 (ふみに) あんた、お店のほうで呼んでるんと違う、早よ行
きなはれ。

ふみ へえ、ほな、すんまへん。

ふみが部屋を出て行く。

彰子が立ち上がり、招き猫を手にとって、しげしげと見て、

彰子

あんた、ほんまにインドから来はったん。ようみたら、ええお顔したはるなあ。ほんまにふみがいうようにインドの偉い神さんかもしれへんなあ。もし、神さんやつたら、お願いがあるんどう。あんた、インドから来はったんやろ、それやつたら、慶彦、知ったはりますなあ。慶彦はんに早よ日本に帰ってくるよう、伝えておくれやす。

すると、招き猫がゆっくりと光りだし、光が天井のほうに伸びていく。彰子が驚いて見つめていると、次第に光が消えていって、そのかわりに白いインド服を着た男が現われる。

男

(彰子に) アッサラーム。

彰子

(釣られて) アッサラーム。

男が呆然としている彰子にゆっくりと近づきいて、招き猫を手に取り、テーブルの上に置いて。

男

(彰子の手を取り) シャル・ウイ・ダンス。

彰子

(釣られて) シャル・ウイ・ダンス。

音楽 。 ゆっくりと男と彰子が踊り出す。

暫く、二人は踊っているが、突然不協和音で音楽が終わると、

彰子

慶彦！。やっぱり、帰ってたの！、私がこんなに心配してるのに、みんなで私を騙してたりして！

(暗転)

2 ちゃんちきおけさ

5月、節句のころ、料亭「兆吉」の離れ座敷。飾り棚の上に黒い「招き猫」が置かれている。濡れ縁の籐椅子に彰子と和江が座って庭を眺めている。

彰子

ええ、お天気になったなあ。お隣の鯉のぼりが、元気に泳いだはる。

和江

へえ、鴨川の鯉も、きつと今ごろは元気に泳いだはりますや

るなあ。

彰子 もうすぐ城北公園の菖蒲祭りやなあ。

和江 鴨の神社の葵祭りも、もうすぐです。

彰子 愛染祭りに生魂（いくたま）さん、天神祭りに住吉祭り、だんじり祭りに神農さん、ほんまに大阪は、にぎやかやなあ。

和江 神幸祭（しんこうさい）に三船祭り、祇園祭りに時代祭り、鞍馬の火祭、瑞饋（ずいき）祭、ほんまに京都は、はなやかです。

彰子 （笑いながら）私ら、ほんまに気があうなあ。

和江 （笑いながら）ほんまどすなあ。

言いながら、和江が立ち上がって、飾り棚を見て、

和江 なんぼ見ても、猫みたいなお顔どすなあ。右の手挙げてはるところなんか、やっぱり招き猫やわ。

彰子 やっぱり、あんたもそう思う。

和江 いいえ、お母はん、これはやっぱり神さんどす。優しい顔したはるから、女神さんかもしれへんなあ。

彰子 女神さん？、インドの女神さんか？

和江 お母はん、インドの女神はんは、ラクシュミーはん、言いますのや。これはきつとラクシュミーはんやわ。

彰子 ラクシュミーはんで、偉い神さんなんやの。

和江 人間に幸福を運んでくれはる、ええ神さんどす。

彰子 幸福なあ、やっぱりあれはこの神さんのおかげやったんやるか。

和江 ラクシュミーはんが幸福をくれはったんどすか。

彰子 そう、私の亡くなったご主人に逢わせてくれはったんや。

和江 お父はんには？
逢うただけやしに、一緒に踊りましたんえ。あの人は昔、中ノ島の公会堂で初めて逢うた時と同じようで、夢みたいやった。

和江 もしかしたら、それも、慶彦さんの魔術かもしれまへんなあ。

障子 魔術？

和江 慶彦さん、インドで料理の勉強だけやのうて、魔術も勉強して来はったんどす。

彰子 インドの魔術いうたら、人が座ったまま、空に浮かんだり、ヒモがスルスル空に登っていたりするんやろ。

和江 最近は、高いビルが突然無くなったり、バスやトツラクから突然火柱が立ち上るような魔術もあるいう話どす。

彰子 そんな怖い魔術はごめんやわ。人がフワフワ浮かぶんやった

ら見てみたいけどなあ。

和江 そやけど、慶彦さんはまだ休業中やから、人は浮かばしまへん。

彰子 ほな、何が浮かぶのん？

和江 招き猫どす。

彰子 招き猫？

和江 へえ、調理場にあるあの大きな招き猫、慶彦さんが呪文を唱えはると、フワフワ、調理場の天井にのぼって行きはるんどす。

彰子 ……………。

和江 それから、台所のお茶碗と一緒にフワフワ、同じように天井にのぼっていきはるんどす。

彰子 …………… それから、どうなるん。

和江 それから、お皿もフワフワのぼって行きはって、招き猫はんや、お茶碗がいつせいに小皿叩いてチャンチキオケサ踊りはるんどす。

言いながら、和江が座敷の中央でチャンチキおけさを踊りだす。すると、彰子も松江と並んで踊りだす。

彰子 (踊りながら) そう言うたら、今朝、慶彦さんがお店の新し

いお料理の試食をしてほしい言うたはったなあ。和江ははどんなお料理か知ってはるん？

和江 (踊りながら) いいえ、私にも秘密で、番頭はんと二人でこつそりやったはりました。そやけど、もうそろそろと違いますか。

彰子 (踊りながら) ほな、行ってみまひよ。

和江 へえ、行ってみまひよか。

二人は踊りながら、部屋を出て行く。

(暗転)

3 魔術

前場のすぐ後、料亭「兆吉」の別の部屋。

誰も居ないが、座敷机が置いてあり、その上に井が二つつ置いてある。ひとつのセットの横に「おかみ予約席」、もうひとつのセットの横には「若おかみ予約席」と書かれた札が置

かれています。

彰子と和江が入ってくる。

彰子 あ、ここみたいや。

和江 お母はんはそつちの席みたいどすな。

彰子 そやけど、誰も居まへんなあ。どないしたんやろ。

和江 この、お井が、新しいお店のお料理どすやろか。

言いながら、二人はそれぞれの席に座って、どんぶりのふたを取る。

彰子 なんや、これ、ただの他人井やな。こっちはただの親子井や。

和江 いつもお店で出してるのと同じやな。

お母はん、チャンキオケサ踊ったら、お腹空きましたやろ。ちよつと戴きまひよか。

彰子 そうやな、ほな、戴きまひよか。

一緒に、井の蓋をとって食べ始める。

彰子 これ、いつものお店の他人どんぶりやな。うちのは但馬産の超極上しか使ってないけど、いつもお客さんにお出ししてる他人どんぶりと一緒にのお味みたいやな。

和江 おいしい！。私、「兆吉」に嫁いできて、ほんまによかつたな思うんは、この他人井を戴く時なんどす。

彰子 こっちは親子井や、これもいつもの名古屋産の地鳥と変わらへんなあ。

和江 おいしい！。私、「兆吉」に嫁いで来て二番目によかつた思うんは、この親子井、戴く時なんどす。

彰子 そやけど、これが何で新しいお料理なんやろ。

彰子は二つの井を見比べて考え込み、和江は彰子に関係なく、二つの井を食べ続ける。

慶彦が部屋に入ってきて、二人のテーブルの横に座る。

慶彦 お母はん、わかりまへんか。

彰子 あ、慶彦はん、あんたが考えた新しいお料理で、これどすか。

慶彦 そうです。この他人井と親子井、結構イケテル、思うやろ。

彰子 これ、今お店で出してるのと何にも変われへんと思うけど。

慶彦 その他人井も親子井も、半分の値段でお客さんに食べてもらお思います。お客さんはみんな喜びはるんと違うやろか。

彰子 そら、お味が一緒にお値段が半分なら誰だって喜びはるやろ。
和江 (食べながら) そら、あきまへん。無理どすえ。なあ、お母
はん。こんなおいしいお丼、値段を半分にしたら、但馬の牛
も名古屋の地鳥も怒りはるのと、違います？

慶彦 九州の牛と奈良のブロイラーやったら、怒れへんと思っんや。
彰子・和江 えっ！(と慶彦の顔を見る)

慶彦 その、他人丼のお肉は九州産、親子丼の鶏はブロイラー、ど
つちも仕入れ値が今までの半分以下やから、半分の値段でお
客さんにお出ししても、十分儲けがあるという訳だす。

彰子・和江 魔術どすなあ!!!

(暗転)

4 内部告発

七月、天神祭りの宵宮、「兆吉」の離れ座敷。ふみが一人で戸
棚の中から書類を出して、一心に見入っている。
彰子が部屋に入ってくる。

彰子 ふみと違うの。

ふみ (驚いて書類から顔をあげ) あ、あかみさん!

彰子 あんた、そこで何してはるの?

ふみ (あわてて、書類を戸棚に戻して) すんまへん。

彰子 お店の帳簿、探してたんやろ。

ふみ へえ、いえ、すんまへん。

彰子 お店の帳簿はそこにないのや。みんな慶彦さんと和江さんに
渡しました。

ふみ へえ、すんまへん。

彰子 ええのや。あんたもおかしいと思てはったんやろ。

ふみ へえ、すんまへん。

彰子 以前と同んなじやのに、値段は半分になってるんやさかいな。

ふみ へえ、すんまへん。

彰子 誰でもおかしいと思いますなあ。

ふみ お肉の産地が違っんですやろ。

彰子 店のもんは、みんな気がついてるんやろか。

ふみ みんな知ったはります。そやけど誰も悪いことやとは思てま
へん。お店が儲かるんやったら、それでええて。そやけど、

おかみさんは違っんですやろ。
あんたに分かるんか。

彰子

彰子が、疲れたような様子で縁側の籐椅子にかける。

ふみ 私、おかみさんが苦しんだはるの知ってます。

彰子 ……

ふみ 今日も、法善寺の水掛け不動さんで堪忍しとくれやすて、手
合わせてはったんでっしゃる。

彰子 ……

ふみ 昨日は四天王寺の亀不動はん。

彰子 ……

ふみ おとついは難波寺の波切不動はん。

彰子 ……

ふみ その前の日は、夕陽丘の愛染さん。

彰子 愛染さんで何拝むの？

ふみ 早よ、ええ人に合わせておくれやす。

彰子 私が……？

ふみ いえ、それは私です。

彰子 (笑いながら) あんたは器量よしやから、きつとええ人が見

つかるえ。

ふみ すんまへん。

彰子 あんたは、どう思う。

ふみ 器量よしやと思てます。

彰子 お店のことやがな。あんたもこれでええと思てるんか。

ふみ さあ、私にはようわかりまへんけど、私のおじいちゃんは、

いつも人間は正直が一番やて言うてました。

彰子 そうか、あんたのおじいちゃんて、おいくつや。

ふみ 二年前に百歳で亡くなりました。

彰子 百歳！、長生きしはったんやあ。やっぱり正直に生きはった

から長生きしはったんやわ。

ふみ お母ちゃんも、嘘ついたらあかん。嘘ついたらその時はええ

けど、いつかは神さんの罰を受けなあかん。私らはなんぼ貧

乏でも正直に生きてたら、そのうち神さんがご褒美をくれは

るといのが口癖でした。

彰子 お母さんの言う通りや。私も今まで正直第一に、いつもお客

さんのためを思て、商売に励んできたから、これまでやって

これたんと違うんやるか。

ふみ でも、私、いっぺんだけおじいちゃんに嘘ついたことあつた

んです。

彰子 へえ、何でなんや。

ふみ おじいちゃん、死ぬ前に、鰻が食べたいて言うたんです。

彰子 おじいちゃん、鰻食べはったこと、なかったん？

ふみ そんなことないんです。うちはみんな鰻が好きやから、いつもお母ちゃんは、スーパーで鰻を買って来てたんですけど、そやけどそれは中国産なんです。そやから、おじいちゃんは死ぬ前にいつぺん、国産の美味しいうなぎが食べたいって言うたんです。

彰子 うちの鰻、食べさせてあげたらよかったなあ。

ふみ それで、私、百貨店に浜松産の鰻を買いに行っただんです。そしたら、浜松産は中国産より十倍も値段が高いんです。

彰子 ふーん、十倍も高いん、やっぱり美味しいもんは高いんやねえ。

ふみ そやけど、私、お金が足れへんかったから、中国産の鰻、買って帰って、おじいちゃん、ほら、浜松産の鰻やで言うて、食べさせてあげたんです。

彰子 ……。

ふみ そしたら、おじいちゃん、こんな美味しい鰻食べたん、何年ぶりやろ。やっぱり浜松産は油が乗って、舌触りも違うなあて、言うたんです。

彰子 ……。

ふみ おかみさん、本物て何ですやろな。

彰子 本物は本物。偽物は偽物。偽者が本物になったら、この世の中にほんまもんの本物はどこにいつてしまうんや。

ふみ おかみさん、中国で生まれた鰻が、小さいうちに浜松に来て、浜松で大きなりはったら、それは、中国産の鰻になるんですか、それとも浜松産ですか。

彰子 さあ、中国で生まれたんやから、中国産やろけど、その鰻はんは浜松で大きなりはったんから、やっぱり浜松産かも知れへんなあ。

ふみ おかみさん、何で九州の牛が偽物で、但馬の牛が本物なんです。但馬の牛がモーと鳴いたら、九州の牛かてモーと鳴くのと違いますか。それともおかみさんは九州の牛はヒヒーンと鳴くと思てはるんですか。

彰子 そら、九州の牛かて鳴く時はモーやはなあ。モーはモーやけど、九州の牛のモーと但馬の牛のモーは、同じようで、違うようで、どっちが本物でどっちが偽者で、なんか私には、モーわかれへん。

ふみが、入り口のほうを伺って、彰子に近づく。

ふみ おかみはん、私、おかみさんが悩んだはる本当のことが分か

つてます。

彰子 本当のことて……？

ふみ おかみさんの本当の悩みは、若おかみさんですやろ。

彰子 和江さん……？

ふみ 若おかみさんがお店のことやりはるようになって、急に繁盛し出したから、それがつらいんですやろ。おかみさんが守つてきはつた「兆吉」の伝統を変えてしまいはつたから、それがつらいんですやろ。若旦那さんを若おかみさんにとられてしまいはつたから、それがつらいのですやろ。

彰子 何、あほなこと！

ふみ おかみさん、ほんまにこのままで、ええんですか。今のままでおかみさんは、我慢しはるつもりですか。

彰子 あんたは私に、何が言いたいんや。

ふみ 新聞社に投書するんです。電話でもかまいまへん。今、このお店でやつてることを世間の人に知って貰うんです。

彰子 そんなこと……

ふみ そうしたら、おかみさんは今の苦しみから救われます。

座敷の中央で顔を見つめあう二人。暫くして、ふみが「あ、なんかお店のほうで騒いでますのと違うやろか、ちよつと見てください」と言いながら、部屋を出て行く。

暫く、思案の彰子が、やがて決心したように、戸棚から携帯電話を取り出し、テーブルの上の新聞を見つめて

彰子 ………。

しかし、そのまま、また新聞を置き直す。

彰子 私は何をしてるんやろ、私はおかみや、この店を守らんとあかん。この店のおかみに誰になろうと、私は「兆吉」のノレを守らなあかん。「兆吉」の秘密は守り通さなあかん。

飾りだなの「招き猫」に向かつて、

彰子 あんたはインドの神さんやろ。名前はわからへんけど、偉い

神さんやろ、それやったら、私の願いを聞いておくれやす。

私を救うておくれやす。

座敷の中央で、慈しむように「まねき猫」を胸に抱いて、

彰子 インドには、不思議な女神さんがおられると聞きました。重い病におかされ、蛇やさそりに苦しめられながら、それでも飢えた子供に乳を与えて、苦しんでいる人々を救おうとする女神さんがいたはるんですやる。もし、あんたが、その女神さんやったら、私を救うておくれやす。お願いやから、助けておくれやす。

そやけど、「この神さんは、ほんまに優しいええお顔したはる。はるばるインドから、私に会いに大阪に来はったんや。そうや、明日は天神祭りどす。私が大阪のお歌を歌ったげまひよ。

ねんねころいち 天満の市は
大根そろえて 舟に積む
舟に積んだら どこまで行きやる
木津や難波の 橋の下
橋の下には かもめがいるよ
かもめとりたや 網ほしや
網がゆらゆら 由良之助

部屋の外で慌しい音がして、ふみが駆け込んでくる

ふみ おかみさん、大変です。新聞社のほうに、お店の産地偽装の内部告発があつたとかで、今、警察の人が大勢来たはります。

(暗転)

5 月の船

9月、仲秋の名月の頃、彰子が自分の部屋の籐椅子に腰掛けて、庭を見ている。

慶彦が白い大きな「まねき猫」を抱えて、部屋に入ってくる。その後ろに和江が続いて、

和江 慶彦さん、それ、重たいやる。私も一緒に運びます。

慶彦 大丈夫や。(彰子に)お母はん、これ、どこに置くんです。

彰子 (立って)ここ、ここ、この「インドの神さん」の横がええと思っんやけど。なんかお顔もそっくりやし、白と黒で釣りおうてますやる。

慶彦 ここでんな。

言いながら、慶彦が「黒い招き猫」の横に並べて「白い招き猫」を置いて

慶彦 なかなか宜しいや、「招き猫」の夫婦みたいで。

和江 そやけど、こつちはインドの神さんやよって、日本の招き猫なんかと並べたらバチが当たるんと、違うやろか。

彰子 そやなあ、かんにんや言つて、謝つとかんとあかな。

慶彦 インドの神さんて、何です。

和江 嫌やわ、慶彦さん忘れはったん。(黒い招き猫を指して)これ、慶彦さんがインドから送ってくれはった神様やないの。

慶彦 アホやな、これ、日本に帰って来た時、難波の古道具屋で見つけた招き猫やで。なんか、色が黒うて変わってるやろ。

彰子・和江 (顔を見合わせ)え、やっぱり、招き猫やったん？

慶彦 (部屋を出ながら)ほな、そろそろ店を開ける時間やな。

和江 ほな、私も。

慶彦 ええ、ええ、今の店やったら、俺だけで十分や。若おかみは、大事な大事な身体やからな。

慶彦が部屋を出て行く。

彰子 和江さん、もしかして、赤ちゃんが出来たん。

和江 へえ、今朝、病院に行ったら三ヶ月で言われました。

彰子 そうか。お店がこんなことになってしもうたけど、慶彦とはちゃんと仲ようにしてくれてやったんやな。三ヶ月いうたら、お店のことが新聞に載ったころですなあ。

和江 嫌やわ。お母はんいうたら。

彰子 (招き猫に手を合わせて)私は、ほんまに和江さんには申し訳ないことをしたとおもて、このインドの神さんに、毎日手をあわせているんです。

和江 お母はん、これ、神さんと違って、招き猫どす。

彰子 そやったなあ。そやけど、うちには有難い神さんや。

和江 お母さんこそ、大事なお店がこんなに小さなってしても、お母さんが一番つらいんと違いますか。

彰子 私はお店より、慶彦と和江さんが仲ようにお店やってくれたら、それが一番。もう、私には「兆吉」の看板なんか大事でも何でもおまへん。

言いながら、二人は縁側の籐椅子に腰を下ろす。

和江 あ、お月さんが出来てきましたな。きれいなお月さん。
彰子 そういうたら、今日は9月の14日、明日は中秋の名月、「采女祭り」の日やな。今年はいろんなことがあったから、お月さんのことなんか忘れてたけど、奈良の猿沢の池から見たお月さんは、ほんまにきれいやったなあ。
和江 私も前に見に行きました。春日山の後ろに絵のようなお月さんが昇ってきはりましたなあ。
彰子 あら、和江さんと同じ意見になったん、始めてと違う？
和江 奈良やからと違います。ほら大阪からも京都からも同じくらい離れてますやろ。

彰子と和江が顔を見合わせて笑う。

彰子 そういうたら、ふみは今ごろどうしてるやろ。
和江 あの子はお店が潰れかけた時に、居らんようになりました。
彰子 私が、早ように、あの子がお店のことで悩んでいるのに気がついてたら、あの子もあんなことしてなかったやろ。
和江 あんなことで、何どす。
彰子 和江はんも気がついてはるやろ。内部告発したんは、あの子やろ。そやけど、あの子が新聞社に投書してくれてなかったら、きつと私がしてたやろけど。
和江 お母はんは、あの子がお店のやってることを悩んで、内部告発したと思っってはったん？
彰子 心のきれいな子やったから。
和江 それで、ふみが悪いと思ってお店が潰れかけた時、身を隠したと思てはるん？
彰子 お店がこんなことになったんは自分の罪やと思ったんやろ。

和江が椅子から立ちあがって、座敷の中央に出てくる。

和江 お母はん、「采女祭り」の始まりのお話で、覚えてはります。
彰子 遠い遠い、奈良に都があったころのお話やろ。
和江 昔、帝の傍に仕えていた一人の采女が、帝の愛が無くなったことを嘆いて、猿沢の池に身を投げたんどす。
彰子 それで、死んだ采女の霊を慰めるため猿沢の池のほとりに、お坊さんが社を建ててくれはったんやな。それが、今猿沢の池のほとりにある采女神社やろ。
和江 でも、別のお話もあるんどす。
彰子 別なお話。

和江 采女が帝の愛を失った本当の理由は、采女が、別な人を愛し

てしまったんです。帝以外の男性を愛することは采女には許されないことやったんです。それで帝の怒りを買った采女は遠いところへ流されたんです。

和江 遠いところというの……、あのお月さんかもしれへんなあ。そう、采女は「月の船」に乗せられて、遠い遠い空の上に乗っていったんです。

和江が彰子を向き直って、

和江 お母はん、ふみが出て行ったんは、私に許されんことをしたからどすえ。

彰子 え、何やて、ふみが何をしたんや。

和江 ふみは慶彦さんが好きになつたんです。もとは慶彦さんが悪いんどすけど、あの人、私に隠れて、ふみを誘いはつたんです。そやから、私は……………。

彰子 ……そうやったんか。それで、ふみは内部告発したんかもしれへんなあ。

和江 内部告発したんは、私どす。

彰子 え、和江さんが、なんで？、

和江 慶彦さんにお灸をすえてあげたんです。

彰子 お灸を……………。

和江 あの人、お肉の産地をごまかして、お店の景気がよくなった時、毎晩、宗右衛門町通いでしたやろ。それだけなら、この人も旦那はんになりはつたんやからしょうがない思ってたんですけど、ふみにまで……………。そやからちよっとお灸をすえてあげたんです。

彰子 この「兆吉」が潰れると分かってて？。

和江 お母はん、私は「兆吉」の嫁に来たんやないんです。慶彦さんとええ家庭を持ちたい思て来たんです。お母はんと仲よう暮らそ思て来たんです。そやのに、お母はんは「兆吉」のノレンを守るのに夢中で、慶彦さんは儲けるのに夢中。そやから、私が「兆吉」を潰したんです。

彰子 やっぱり、うちの嫁はお転婆やなあ。

(幕)